

集落の民俗芸能における集落外の演者を
確保する「通い神楽モデル」の構築
—花巻市大償神楽における集落主導の活動
モデルの設計と実装—

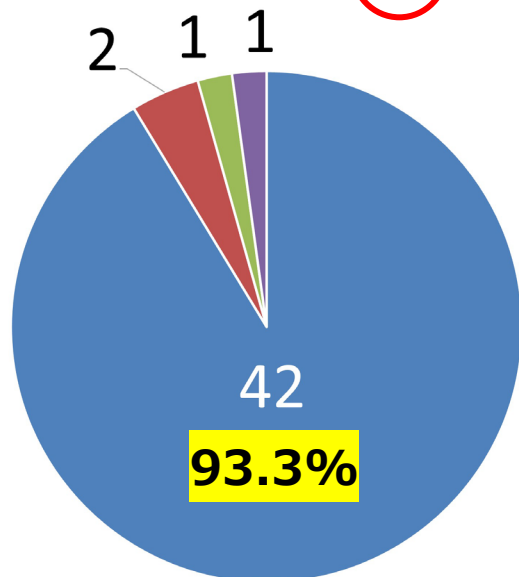
慶應義塾大学大学院 政策・メディア研究科

吉田 真彦

本研究の目的と背景

民俗芸能の演者確保の新たな手法の基礎を作る

今後の活動における「活動中断が不安」な理由(n=45)



原因は
様々だが…

演者確保の「手法」に
着目

本研究では…

- ・現在の演者確保の手法における課題解決モデルを構築・実践
- ・将来の演者確保の手法と行政機関の役割を考えるための基礎を作る

■ 後継者不足

■ 仕事や家庭の都合との調整

■ 演者の健康状態

■ 代替わり等による継続意識の希薄化

出典：平成29年度花巻市民俗芸能団体状況調査
結果報告書(グラフは研究者作成)

花巻市職員 × 神楽の演者

おおはさままち
花巻市大迫町
大償地区



市職員として「花巻市で働く」

大償（おおつぐない）神楽の
演者として「神楽を舞う」

民俗芸能を「政策目的の達成」に活用

ライフワークとして神楽を続けたい

民俗芸能の伝承 = 「集落と人をつなぐ力」の維持

集落の維持再生機能

- 人が集い戻る機能(2014,阿部)
- コミュニティの維持(2014,阿部)
- 地域の再生機能(2015,橋本)
- 地域の精神的支柱(2015,橋本)



民俗芸能の性質

- 演者が地域の構成員(1998,小林)
- 信仰・神事・祭りと不可分な形で演じられてきた(2014,笹原)

×



民俗芸能には、「集落と人をつなぐ力」がある

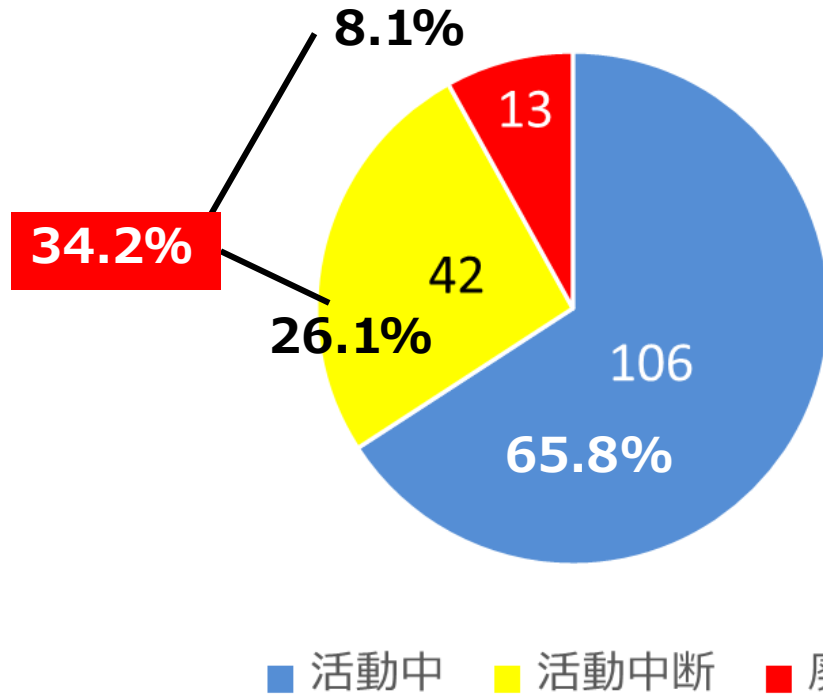
例：東日本大震災発災の1か月後には、民俗芸能が再開(2015,橋本)



民俗芸能の演者確保 = 「集落と人をつなぐ力」の維持

民俗芸能はゆっくりと消滅に向かっていている

岩手県花巻市の民俗芸能の活動状況(n=165)



出典：花巻市文化財課提供資料よりグラフ作成

原因は演者不足

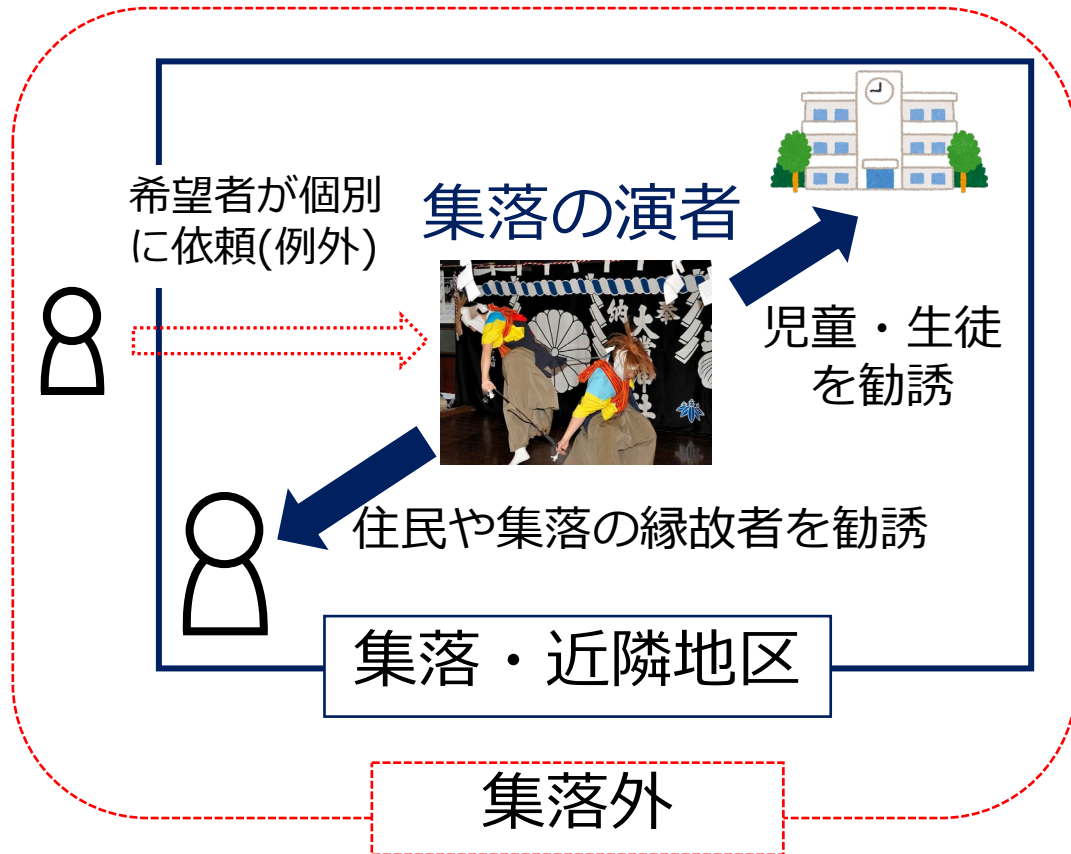
演者不足の原因として…

- ・ 人口動態の変化
— 地域の過疎化、少子化現象
- ・ 生業形態の変容
— 地域住民のサラリーマン化
(1999, 星野)

これらの原因を集落の努力のみで解決することは困難

「伝承の論理」が演者確保の手法を規定

現在の演者確保の手法



伝承の論理(2006,澁谷)

- 演者として望ましいのは「近郷の人々」
- 伝承活動の本拠地は「集落」
- 民俗芸能の伝承責任は集落住民が担う

「集落外の演者確保」に着目

- 集落住民のみの活動が限界を迎えると、集落外の演者に頼る。
(2009,星野)
- 一部の民俗芸能では、集落外の演者が活動(2014,阿部,2006,澁谷)
- 「集落外の演者」の活動における集落の演者の活動に着目した研究は少ない。
- 演者不足を課題に掲げる行政機関による「演者確保の支援」に関する研究は確認できない。

リサーチデザイン

リサーチクエスト

- R Q 1 集落外の演者が、集落の演者として活動し続けるための要因は何か。
- R Q 2 集落の演者が主導する「集落に通い、民俗芸能の芸を習得する仕組み」による、集落外の演者の活動を、集落の演者はどのように評価するか。
- R Q 3 集落外の演者が、集落の演者として活動し続けるために、行政機関が担うべき役割は何か。

集落外の演者による活動事例の調査

集落の演者主導で、集落外の演者が伝承者として活動する手法を構築

民俗芸能名	集落外の演者の 居住地	活動開始の契機	集落外の演者の 活動概要	集落外の演者の意識
なかのななづまい 中野七頭舞 (岩手県岩泉町)	北海道、東北、 関東、関西	東京民族舞踊研究会の 依頼による、集落の演 者主催の「講習会」 の 開催(1993年) ※以後、講習会は 毎年のように開催	<ul style="list-style-type: none"> ・ 居住地でのサークル活動 ・ 集落の演者との共演 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「地元でない人間（力量も大したことない）なのに、「これが本物の七頭舞だ」と思われてしまう」 ・ 「地元の間人ではない自分たちが保存会と一緒に出演することはよいことなのだろうか」
おおいではやちね かぐら 大出早池峰神楽 (岩手県遠野市)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 市内 (近隣他市からのIターン者) ・ 近隣他市町村 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 神楽に加わった最初のIターン者による勧誘(1992年) ・ 神楽体験を中心としたグリーンツーリズム 	集落の演者との稽古、 祭礼時の公演出演 ※祭祀行事は集落住民 が担う「棲み分け」の 構図	<p>(Iターン者)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 「私たちだけが演じても地域の良さは伝わらない」 ・ 「永住を決めたわけではないので、いつまでできるか分からないが、できるうちはやろう」

阿部,2014、澁谷,2006を参考に作成

仮説の導出

集落外の演者を取り巻く現状

・都市住民の協力意向は高い
(2006, 澁谷)

・集落外の演者から依頼 (2014, 阿部)
・Iターン者による集落外へのPR活動
(2006, 澁谷)

集落外の演者は「芸の違い」や「集落に定着していない」ことを理由に、集落の演者の活動との間に一線を引く
(1993, 西郷、2006, 澁谷、2014, 阿部)

・行政は文化財保護のため活動資金の支援等を実施(1989, 中村、2006, 大島)
・観光・農政・教育等への活用
(1998, 中谷、2009, 俵木)



仮説

1 「集落外の演者」を共に活動する者として受け入れる仕組みがあると、協力意向の高い者が参加するのではないか？

2 集落の演者が主導して、集落内外の調整を行うと、集落外の演者を意図的に掘り起こせるのではないか？

3 集落内外の演者が共に稽古する機会を複数回設けると、集落外の演者の伝承活動への参加が進むのではないか？

4 行政機関は、集落の演者による演者確保の活動を直接的に支援する必要があるのではないか？

RQ1・RQ2

RQ3

仮説検証のための調査方法

【RQ1、RQ2】→ 仮説1～3

- ① 仮説を概念化し、概念に基づくモデルを設計の上実証実験
— モデルの実証実験から得た質的データの分析・考察

【RQ3】→ 仮説4

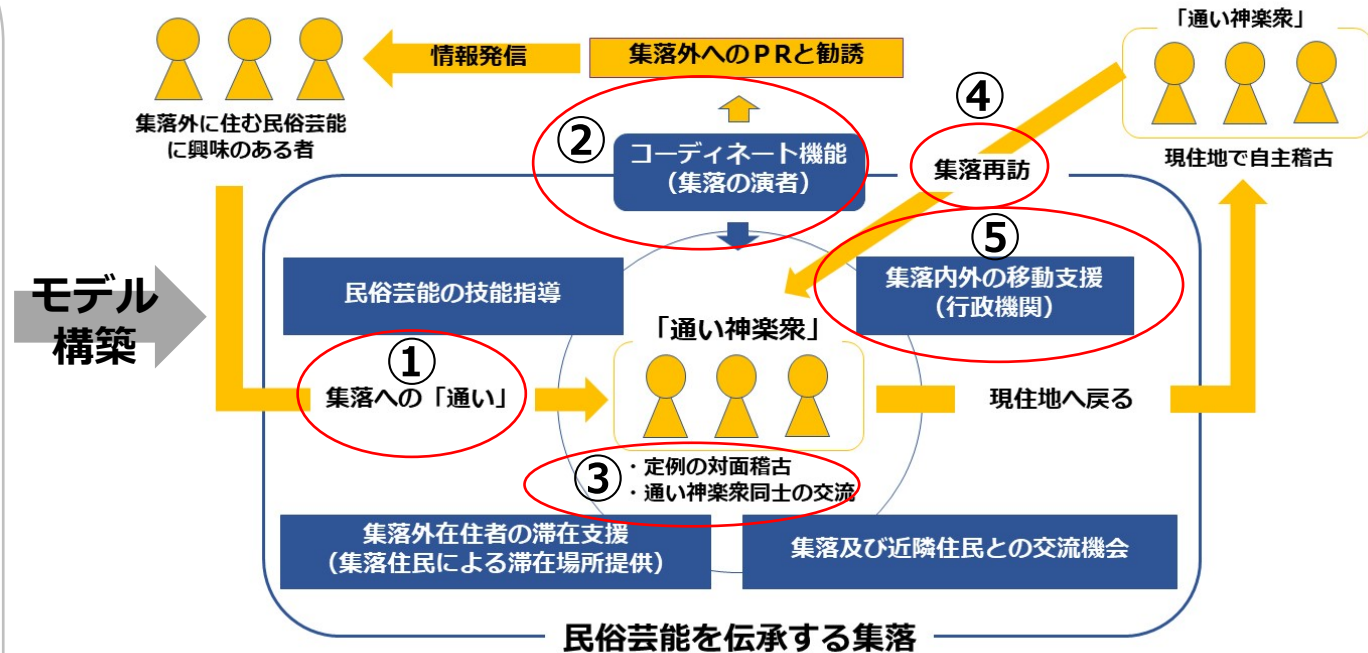
- ② 民俗芸能の維持保存政策に関する実態調査
— 「演者不足の解消に資する政策」の実態に関する
担当部署へのインタビュー及び資料調査結果の分析・考察

仮説検証①：「通い神楽」の概念とモデルを構築

「通い神楽」の概念構築

- ①現住地からの「通い」で活動
- ②集落の演者が主導して実施
- ③集落外の演者が「集落の演者が行う民俗芸能活動」に参加
- ④集落内外の演者が共に活動の仕組みを改善
- ⑤行政が「通い」をバックアップ

「通い神楽モデル」を構築



通い神楽モデルの実証実験の設計

設計項目	設計内容
実施期間	2018年7月20日～2019年2月28日（7か月）
目的	通い神楽モデルによる「集落外の演者確保」に係る課題の抽出
実装対象(民俗芸能)の条件	<ul style="list-style-type: none"> a 集落外の演者に芸の指導が可能 b 演者確保を課題とし、演者の過半数が高齢者であること c 芸の習得に複数回の稽古を要する民俗芸能 d モデルの実践中でも、芸の指導方法や受入内容の調整が可能
参加対象(集落外の演者)の条件	<ul style="list-style-type: none"> A 民俗芸能の演者としての活動に興味を持つ者 B 実証実験期間に、集落に複数回通うことが可能な者 C 首都圏在住者
行政機関の支援	<ul style="list-style-type: none"> ・参加対象への交通費補助 ・最寄りの交通機関から、集落への移動支援
実施内容	<ul style="list-style-type: none"> ・集落外の演者の募集活動（2018年7月20日～8月19日） ・集落への通いによる対面稽古（9月～12月の間で4回：各回1泊2日） ・実証実験後のグループインタビュー（1月から2月：各1回）
収集データ	<ul style="list-style-type: none"> ・参加対象の参加動機 ・実証実験中の発言・行動 ・グループインタビューの記録
分析方法	S C A T (2008,大谷) ※全国で22,528件ある民俗芸能の内、1事例の取り組みという小規模データを扱う

大償神楽（岩手県花巻市）にモデルを実装

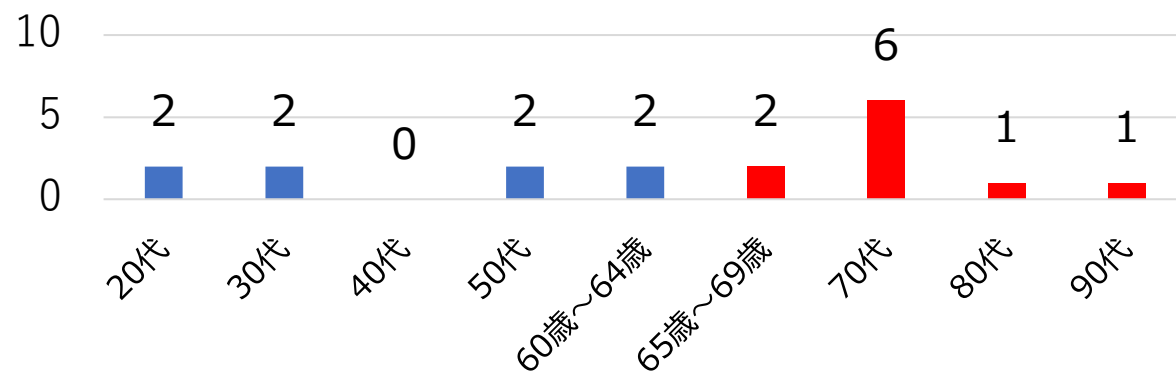
選定理由

- 首都圏の学生、県外の劇団や太鼓集団等の依頼による指導経験あり
→演者確保につながったケースも
- 舞と楽器の習得には反復稽古を要する（40演目）
- 研究者の介入が可能であり、モデル実践のに要する集落内外の調整を行う手法の構築が可能

大償神楽の概要

- 国重要無形民俗文化財+ユネスコ登録
- 花巻市を代表する民俗芸能
- 演者確保の活動は、集落及び近隣地区の児童・生徒の育成が中心

大償神楽の演者構成（n=18）



演者の高齢化 + 将来の演者不足

共にモデルを構築する「集落外の演者」

通い神楽モデルを共に構築していく
「集落外の演者」の検討

参加する集落外の演者の役割

- 1 大償神楽の体験と稽古による芸の習得
- 2 通い神楽モデルの課題抽出
- 3 大償神楽との通い神楽モデル改善
- 4 改善版通い神楽モデルの効果検証 (※)

今回の実証実験は課題抽出を目的に実施

募集活動を行いやすい

慶應義塾大学 S F C の学生・研究員を
選定

実験参加者の募集に応じた者を抽出
(5名程度の定員を設定)

岩手県花巻市×慶應SFC 定員5名程度
8/19(月) 23:59
申込締切

民俗芸能の「演者」を軸に、新たな人の流れを創る
「通い神楽衆」、求ム。

主な活動内容(2019年9月～12月の予定)

岩手県花巻市の大迫町(おおはさままち)内川目大償(おおつくない)地区をフィールドに活動します。
 ✓ 大償神楽の体験会参加(しんがく体験)
 ✓ 現地での対面指導の受講(三番受審得:月1回程度)
 ✓ テレビ会議による遠隔指導の受講
 ✓ 通い神楽についての意見交換・議論への参加

こんな学生におススメ!

- ✓ 民俗芸能に興味がある学生
- ✓ 「舞・踊り」に興味のある学生
- ✓ 地域活性化に興味のある学生
- ✓ 研究フィールドを探している学生・・・など

ここがポイント!

- ✓ 花巻市を代表、ユネスコ世界無形文化遺産登録、市内外・海外で活躍の「大償神楽」の芸を習得可能。
- ✓ 花巻市の取り組みや地域課題の学習が可能。
- ✓ 参加希望者の希望に合わせ、現地訪問日を調整。
- ✓ 花巻市と慶應義塾大学SFCの連携により、現地への交通費(湘南台駅-新花巻駅)、宿泊費は学生負担なし。

「通い神楽衆」への申込 募集説明会を開催します!

メール本文に、①氏名(※りがな) ②性別 ③学部(研究科)・学年 ④現地訪問時の出発地、⑤参加希望理由 ⑥電話番号・メールアドレスを記載し、tama-lab@sfc.keio.ac.jpへメールをご送信ください。

7月31日(水) 16:30～
湘南藤沢キャンパス k507

- ✓ 岩手県花巻市・大償神楽の説明
- ✓ 活動内容、活動スケジュール説明
- ✓ 現地訪問時の留意事項説明

※1 申込希望の方は、原則として右記募集説明会にご参加をお願いします。
※2 参加希望理由により、参加者を選考する場合があります。

募集説明会へ参加希望の方は、説明会参加希望の旨をtama-lab@sfc.keio.jpへ7月30日(火)までにメールにてご連絡ください。

申込・お問い合わせ：慶應義塾大学SFC玉村研究室(担当:吉田 真彦)
TEL 090-7662-8209 / MAIL tama-lab@sfc.keio.ac.jp

チラシの学内掲出

SFCnow! (情報交換コミュニティ) 定員5名程度
8/19(月) 23:59
申込締切

プライベートグループ・メンバー4,561人

情報 ディスカッション アナウンス メンバー イベント

吉田真彦さんが投稿をシェアしました。
2019年7月20日

【民俗芸能の「演者」を軸に、新たな人の流れを創る「通い神楽衆」、求ム。】
始めまして! 政策・メディア研究科修士1年の吉田 真彦と申します。
私は、地元、岩手県花巻市大迫町(おおはさままち)内川目大償(おおつくない)地区に伝承される「大償神楽」の舞手として活動しています。
SFCでは、花巻市を代表する魅力である大償神楽をフィールドに、持続的な民俗芸能の伝承活動として、在住地に関わらず、民俗芸能を演じることに興味を持つ人が、集落に遠くまで芸を学び、演者としての活動参加を促進することで、演者を確保し、民俗芸能を軸に新しい人の流れを創る「通い神楽」のモデル構築をテーマとして研究中です。
そこで、実際に現地(岩手県花巻市)で民俗芸能の体験、芸の稽古に取り組みながら、通い神楽を成立させるための検証と一緒に取り組んでくれる「通い神楽衆」を募集しています。具体的な活動内容、申込方法等につきましては、別添のチラシをご参照ください。
この募集にあたり、7月31日(水)の16時30分より、k507にて募集説明会も開催いたします。
民俗芸能やお祭りに興味がある方、舞・踊りに興味がある方、地域活性化に興味がある方、自分の研究フィールドを探している方など、ぜひお気軽にご参加ください。
趣旨に賛同し、参加していただける皆さまと、民俗芸能の将来を考えていけることを楽しみにしています。
よろしくお願いいたします!

岩手県花巻市×慶應SFC

SFC NOW! への投稿

応募者は地域・民俗芸能・通い神楽の仕組みに興味

No.	氏名	所属	年齢	性別	民俗芸能の経験	予備知識	参加動機
1	A	SFC研究所 上席所員	61	男	なし	○	早池峰神楽に仕事で関わり、高い関心あり ワインを中心とした食の取組にも興味
2	B	SFC研究所 上席所員	25	男	なし	×	自分のルーツである岩手に身を持って 関わりたい
3	C	政メ修士1年	23	男	あり (けんか祭り)	×	伝統的な祭り及び歴史の浅いイベントに外部か らの参加者が与える意味や参加者意識について 知りたい
4	D	政メ修士1年	22	男	あり (阿波踊り)	×	新しい地方と都市住民の交流の形として 興味あり
5	E	総合政策3年	20	女	あり (盆踊り)	×	研究フィールドも見据えて、岩手県花巻市の民 俗芸能に触れて、体験したい

※倫理的配慮により、氏名はランダムのアルファベット表記としている。
なお、6名中1名はデータ公開許可が得られず、研究対象外とした。


実証実験の1コマ（三番叟の舞の稽古）



通い神楽衆へのグループインタビュー

調査対象	実証実験に参加した通い神楽衆 4 名
実施時期	2020年2月25日（1回：2時間）※オンライン開催
目的	通い神楽モデルの改善に係る集落外の演者からの意見収集
調査方法	<ul style="list-style-type: none">・ 研究者が進行・ インタビュー項目に沿って、自由な発言と意見交換を促す・ 発言内容について記録（主にメモ）
主なインタビュー内容	<ol style="list-style-type: none">（1） 実証実験に参加した感想（2） 通い神楽モデルの実践で感じた課題（3） 通い神楽モデルの改善アイデア（4） 2020年における通い神楽の活動の方向性

大償神楽へのグループインタビュー

調査対象	大償神楽保存会員（出席13名）
実施時期	2020年9月21日（1回：1時間） ※新型コロナウイルス感染症による集会制限で2月までの実施困難
目的	通い神楽モデルによる取組への集落の演者の評価に関する意見収集
調査方法	<ul style="list-style-type: none">・インタビュー項目に沿って、保存会員による自由発言を促しながら、意見を収集・述べられた意見の中で不明な点は研究者が確認をしながら進行・保存会員間での意見交換や議論の内容も記録 
主なインタビュー項目	<ol style="list-style-type: none">(1) 通い神楽衆の活動に対する感想(2) 通い神楽による大償神楽へのメリット（デメリット）(3) 保存会員から見た大償神楽に取り組む価値(4) 他地域の在住者が大償神楽の稽古に参加する上での課題

仮説検証②：民俗芸能の維持保存政策の実態調査

調査対象	岩手県花巻市（実証実験の開催地）
実施時期	2020年9月25日（1回：1時間30分）
調査の目的	民俗芸能の維持保存政策の実態及び政策形成に係る根拠の収集
調査方法	<p>①教育部文化財課担当者へのインタビュー ※インタビュー前に、通い神楽モデルの取り組みを説明。</p> <p>②資料調査</p> <ul style="list-style-type: none">・民俗芸能団体との意見交換会の会議録・令和2年度事業説明資料・花巻市内の民俗芸能団体の活動状況・花巻市まちづくり総合計画第3期中期プラン
主な調査項目	<ol style="list-style-type: none">（1）民俗芸能の維持保存に関する事業内容（2）民俗芸能団体による演者の確保活動への支援の有無（3）民俗芸能団体のニーズ・課題の把握方法（4）演者の育成・獲得に関する民俗芸能団体の意見（5）民俗芸能の維持保存政策に期待する成果（6）文化財の「活用」を踏まえた今後の政策展開

調査結果と考察

集落外の演者を確保し、活動を持続する要因(RQ1)

SCATフォームによる通い神楽衆の発言・行動記録の分析（抜粋）

赤：集落外の演者を確保し、活動を持続する要因

ストーリーライン
(現時点で言えること)



- ・通い神楽衆は、当初は民俗芸能の「一舞」に取り組み、やりきることに不安があったものの、1回目の対面稽古終了後、**通い神楽衆による自主的な稽古**や、**新たな芸の習得方法の開発**等、現住地においても自らの芸の向上を図ろうとする行動が起こった。
- ・最終回の第4回が終了した際には「**集落の演者の皆さんが熱心に指導してくれてありがたかった**」「今後も大償神楽に通い続ける方法を考えたい」といった発言が複数の参加者から見られた。
- ・実証実験の終了後に実施したグループインタビューでは、通い神楽を継続する上で、**通い神楽による活動意義の明確化**、「通いを中断した際の対応」「通い続けるためのモチベーションの維持・向上のための成果披露の機会創出」、**「民俗芸能の経験を持つ者同士のコミュニティ形成」**「集落の演者も通って指導する、**双方向の通い**」等の必要性が、通い神楽モデルの改善時に集落の演者の協議を要するものも含めて示された。

大償神楽による「通い神楽」への評価(RQ2)

SCATフォームによる大償神楽の演者の発言・行動記録の分析（抜粋）

赤：演者確保における課題 / 青：通い神楽モデルの実装による利点

ストーリーライン
(現時点で言えること)



通い神楽モデルは、**演者確保の手段としては地理的、時間的制約**が懸案となるという指摘があった。一方、「**自分が教えている内容が大償神楽として正しいか**」と**を振り返る契機**であること、集落外の演者の発想から、**芸の習得について見取り稽古以外の有効な手法に対する気づきを得られた**、としている。

また、**真剣に神楽の稽古に取り組んだ人が地域との橋渡し役になり、神楽の存在や魅力を広めてくれることに期待**している。さらに、通い神楽衆が「**真剣に稽古に取り組んでいる**」ことが伝わると、**真剣に指導しなければならない**という意識が芽生え、**稽古を通じて「心が通う」**状態が生まれていた。

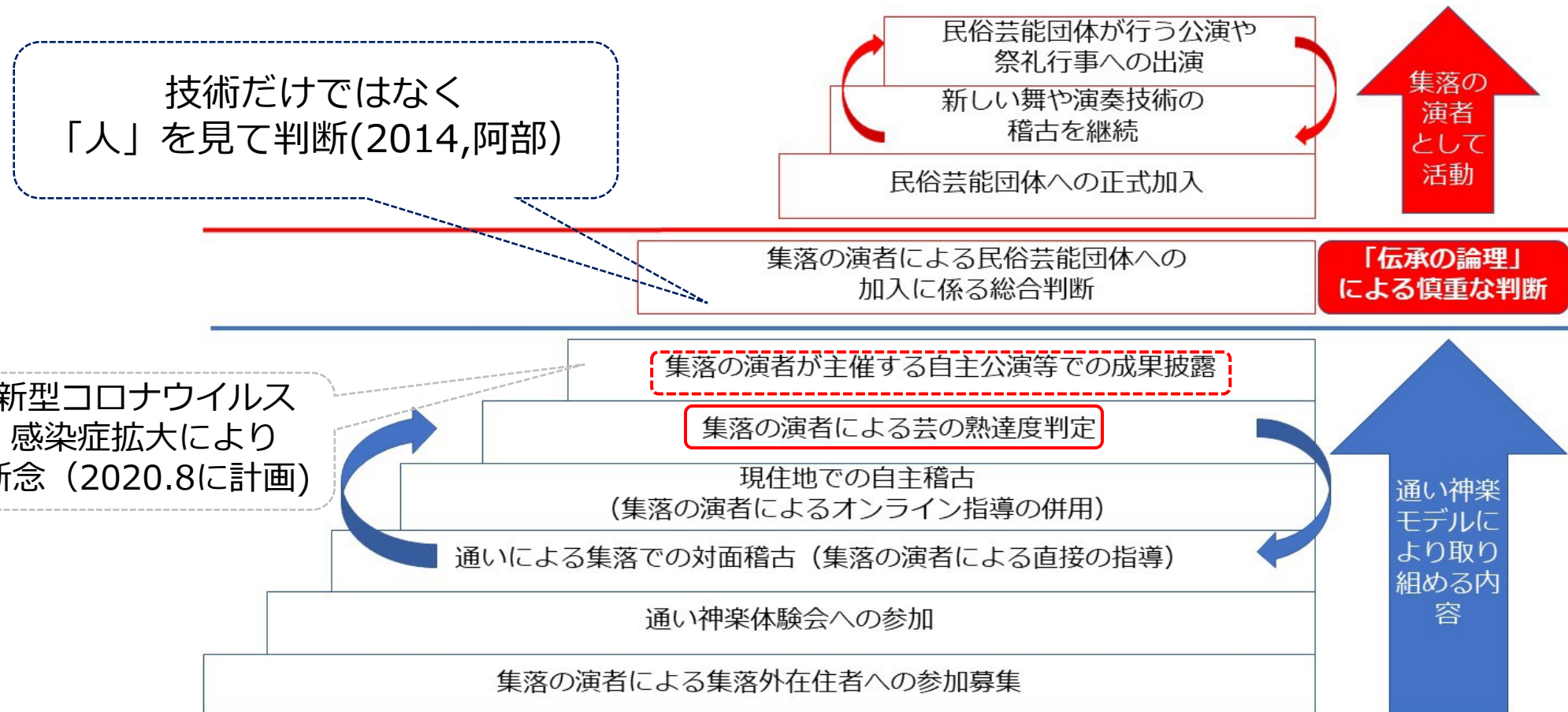
集落外の演者の受け入れには、複数の会員が必要性感じているが、集落住民が守ってきた歴史を尊重し、**集落住民で守ってくのが基本である**という意見もあった。

また、**芸が上達しないことによる自然淘汰**も懸念され、**本当に好きで、自主稽古を重ねながら、芸の向上を図るくらいでなければ続かない**という声もあった。

そして、集落外の演者が伝承活動に参加するには、大償神楽を**稽古し続け、活動に参加し続けられるかどうか等を、保存会員が見極める基準が必要**と考えている。

集落の演者は集落外の演者の活動を「段階的」に承認

集落外の演者の活動内容と伝承の論理が噛合うことが必要



演者確保に関する花巻市の政策的支援の現状

民俗芸能団体

花巻市

民俗芸能を披露する場

行政から学校への働きかけ

子供たち、若い人が楽しくできる
環境づくり・気を引く工夫

要望
意見

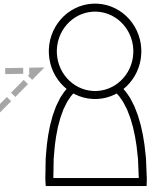
- ・ 民俗芸能の公演を主催
- ・ 小中学校への民俗芸能団体派遣

民俗芸能の周知と団体の活動意欲(の維持)が目的。公演や練習を通じて興味を持ってもらい、**あわよくば後継者に入ってもらえるのでは**という成果を期待。

実際**どうしていいかわからないっていうことなんだと思います**。皆さん、学校に行ってもまず見せて、なんぼ児童・生徒を釣り上げられるかに期待して活動しているってことなんですよね。若い演者に聞いても学校かなって。

見解

集落・近隣地区・学校からの演者確保のみを続けようとする意見・要望



文化財課
担当者



文化財課
担当者

出典:民俗芸能団体の意見交換会記録 (花巻市,2018,2019)

演者確保には直接作用せず、副次的効果に期待するのみ

「集落外の演者確保」については懐疑的

吉田



演者確保の支援としては、公演の機会を増やして、鑑賞者が興味を持つきっかけをつくれなかっていうところですよ。

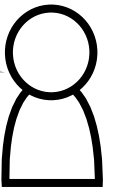
現状としてはそれしか手が出せないと考えていると。**有効なアイデアもない**ので。(民俗芸能)団体さんに「後継者入れろじゃ」と言える立場でもないし。

文化財課
担当者



デリケートである(個々の伝承の論理がある)から聞きにくい？

中々ちょっとデリケートな感じもあるし、**移住してきてやっているんだけど、「ちょっと違うもんな」みたいに言われる**ことがあってみたいな話も聞こえて来たりしますよね。



(近隣の)演者が不足しても、遠方の出身者等が帰ってくる機会に民俗芸能を(集落で)やれるような支援があってもよいのでは。

そういった人たちが何人もいてっていうのならいいんだろうけど、**特定の民俗芸能団体さんの、特定の人に行くようなのは市のお金としてどうなんだろう。**お金出せば助かると思うけど、**やったねよかったね、で(成果は)？**となるんだよね。



「集落外の演者確保」が進まない原因

「集落外の演者確保」は、
対策として検討されていない

澁谷(2006) が指摘する原因

- ①集落外の演者への指導は負担大
- ②演者として定着するかを疑問視
- ③集落が「どうにかなる」と楽観視

疑問…

演者確保の手法を広げる
契機が無いことも理由ではないか？

推測理由
として…

- ・先行事例において「依頼」から始まった集落外の演者の活動が**今も持続**
(2018,大正大学地域構想研究)
- ・大償神楽も**同様の経験有**→**通い神楽を受入**
- ・通い神楽参加者は「**活動の意義**」を求める

つまり…

集落外の演者との活動における**経験が、
伝承の論理が拡張したのでは？**

このことから…

推察される+aの原因

- ④**演者確保に関する知見の不足**
- ⑤**意義や醍醐味等の情報発信の不足**
- ⑥**伝承の論理を見直す機会の不足**

「集落外の演者確保」を促す行政機関の役割

集落外の演者確保が進まない原因	原因が起こる理由	行政機関による原因解消の可能性	行政機関が果たす役割の方向性
①集落外の演者への指導は負担大	不明	理由不明のため、現時点では困難	—
②演者として定着するかを疑問視	不明	理由不明のため、現時点では困難	—
③集落が「どうにかなる」と楽観視	今はできないが、過去に演者の経験から、やればできると思っている(2006,澁谷)	集落住民の生活や意向に左右されるため、現時点では困難	—
④演者確保に関する知見の不足	既存の演者確保の手法以外を考える契機の不足	行政機関が有する演者確保事例等の情報提供	演者確保の手法に関する情報収集・提供及び学習機会の創出
⑤意義、醍醐味等の情報発信の不足	言語化して伝えることに限界あり(2007,佐々木)	演者が有する情報の整理や発信の支援	集落の演者が行う民俗芸能の情報発信の場づくり
⑥伝承の論理を見直す機会の不足	既存の演者確保の手法以外を考える契機の不足	契機を得るための活動内容により可否あり	民俗芸能団体が新規に行う演者確保の取り組みの側面支援

結論と本研究の限界

結論①：伝承の論理の「拡張」の必要性

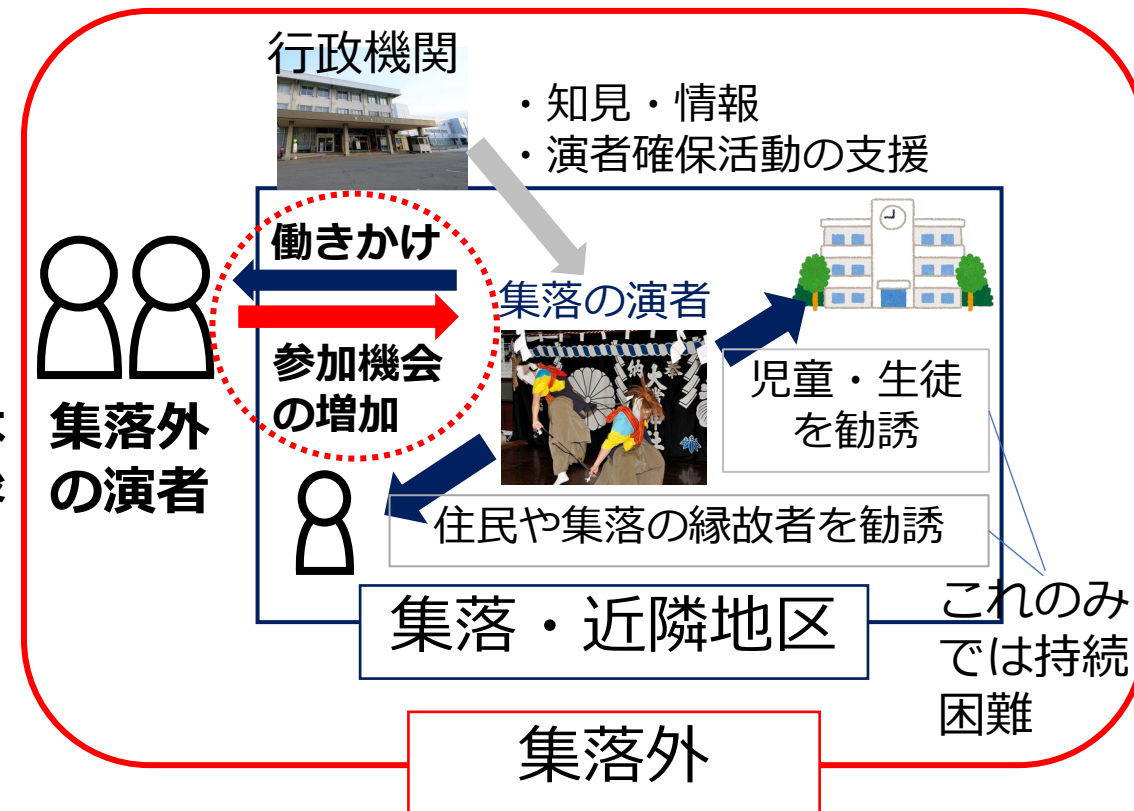
集落の演者の主導によって、集落外の演者の活動参加の機会を増やし、共に活動する経験を通じて伝承の論理を拡張することが必要

現在の伝承の論理



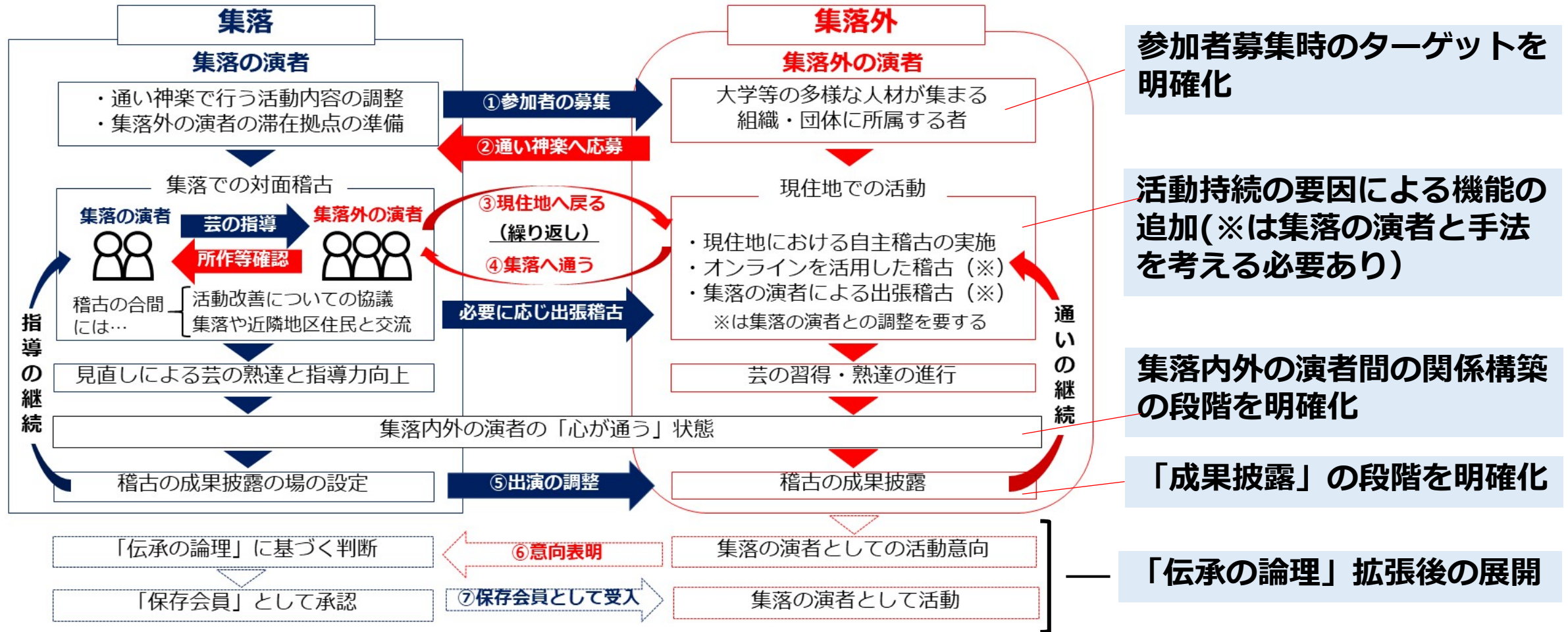
人口減少は
全国で今後
80年続く
(※)

将来の伝承の論理



結論②：通い神楽モデルの改善

現時点では「稽古と成果披露を繰り返す」までが実現できる成果



結論③：集落外の演者確保に資する行政機関の支援策

行政機関の役割の方向性	意図	具体的な事業	期待される成果 (成果の把握方法)
①演者確保の手法に関する情報収集・提供及び学習機会の創出	集落の演者が、演者確保の新たな手法を検討している (伝承の論理の見直し)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 演者確保の先進事例の調査研究 — 結果を意見交換会等の場で情報提供 ・ 先進事例や手法に関する学習会開催 — 民俗芸能団体の希望による講師調整 	演者確保の新たな手法を検討する民俗芸能の増加 (民俗芸能団体への質問紙調査)
②集落の演者が行う民俗芸能の情報発信の場づくり	集落の演者自身が、民俗芸能の意義や価値を発信している (伝承の論理の拡張準備)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 行政の情報発信媒体の活用 — 公演情報の他、演者の思い、公演や稽古の様子等が発信 — 広報誌、HP、SNS、市町村外在住者向けのサイト（移住定住、観光、シティプロモーション等）への掲載 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 民俗芸能との接点を持つ者の増加 (主催公演の来場者数, SNSのいいね!数, HP閲覧数等) ・ 政策への活用促進 (各部署への照会)
③民俗芸能団体が新規に行う演者確保の取り組みの側面支援	集落の演者が、演者不足解消の手法を開発・実行している (伝承の論理の拡張)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 集落の演者による演者確保の実践支援 — 連携する大学・企業等へ参加者募集のアプローチを仲介 ・ 集落外の演者の成果披露会の開催支援 — 会場確保や学校・関係団体等への案内 	民俗芸能の演者活動への参加者増加 (支援事例の追跡調査)

本研究の成果

本研究の目的：民俗芸能の演者確保の新たな手法の基礎を作る

改善版通い神楽モデル構築の成果

- ・ 伝承の論理を拡張する必要性を示唆
- ・ 集落外の演者の参加を促す、集落の演者主導の募集手法を構築（**6名の参加実績**）
→**地方への人の流れを生む可能性も示唆**
- ・ 集落外の演者の活動意欲を高め、集落の演者と共に芸の熟達を図る手法を構築
※今後、実証実験を設計し、効果を検証

行政機関の役割検討の成果

- ・ 民俗芸能の維持保存政策による「集落外の演者確保」が**進まない理由を新たに導出**
- 十 行政機関が「演者不足」解消のために担う役割として、伝承の論理の拡張を段階的に促進する政策を提案
※今後、行政機関と協議の上効果を検証

**演者確保の新たな手法の基礎の確立には至らなかったが、
新たな手法の基礎づくりのための検証を行う土台が構築された**

本研究の限界

- **研究者がモデルの設計及び実証実験に全般的に介入**
 - 研究者以外による実践について、検証が必要
- **モデル実践が1つの民俗芸能、1母集団の集落外の演者のみ**
 - 他の民俗芸能や集落外の演者への汎用性検証が必要
- **民俗芸能の「活用」の視点による政策の検討**
 - 文化財保護の視点以外からのアプローチについても検討を要する
- **新型コロナウイルス感染症の拡大による実験の制限**
 - 改善版通い神楽モデルの実証実験は、移動制限により断念。
県内大学等が対象の実証実験を設計し、今後効果を検証

参考文献

- 相原 進 (2003) 「民俗芸能の保存と後継者育成問題--京都市内における『六斎念仏』の保存活動を事例に」, 立命館産業社会論集, 39 (3), 53-68
- 阿部 未幸 (2014) 『地域における郷土芸能の役割と今後の可能性: 岩手県岩泉町「中野七頭舞」を事例として』, 総合政策, 15 (2), 161-180
- 石川 誠大 (2016) 「御囃子聞こゆ 海ある栈道: 岩手県釜石の原動力」, 法政大学大学院紀要.デザイン工学研究科編 = 法政大学大学院紀要.デザイン工学研究科編 (5), 1-3
- 一ノ倉 俊一, 黒沼 幸男, 大迫町観光協会 (1984) 「早池峰神楽」, 郷土文化研究会井上 果子 (2017) 「山間地の伝統文化継承に見る新たな農村文化担い手の形: 高千穂郷・椎葉山地域における神楽継承の事例研究」, 農村計画学会誌, 36 (0), 375-382大石 泰夫 (1998) 「民俗芸能と民俗芸能研究」, 日本民俗学, 213: 82-97
- 大島 暁雄 (2006) 「無形の文化財の保護をめぐる--特に、民俗芸能を中心に」, 芸能の科学 (33), 133-150
- 大谷 尚 (2008) 「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案
—着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続き」, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要.教育科学, 54 (2), 27-44
- 小田島 清朗 (2005) 「報告 岩手県の小中学校における芸能伝承について」, 民俗芸能研究 / 民俗芸能学会編集委員会 編 (34), 93-104
- 甲斐 友朗, 柴田 祐, 澤木 昌典 (2014) 『兵庫県但馬地域の消滅集落における元住民による「通い」の実態に関する研究』, 79 (695), 123-129
- 川野 裕一郎 (2013) 「次世代への神楽の伝承: 備中子ども神楽と芸北神楽高校神楽部の事例から」, 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学・心理学・教育学: 人間と社会の探究 (75), 49-65
- 川野 裕一郎 (2014) 「文化財行政の抱える問題: 島根県佐陀神能の事例から」, 慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学・心理学・教育学: 人間と社会の探究 (77), 127-158
- 神田 より子 (2015) 「神楽の本質と変容 (〈民俗芸能学会〉創立 30 周年記念 平成二六年度大会シンポジウム 神楽の本質と変容)」, 民俗芸能研究 (58), 16-21
- 熊谷 嘉隆 (2016) 「秋田県の民俗芸能:現状と課題そして今後について」, 国際教養大学 アジア地域研究連携機構研究紀要, 2, 1-8
- 小林 香代 (1998) 『課題としての民俗芸能研究』に見る問題提起--「過去」の認識という視点から, 民俗芸能研究 (26), 53-73
- 西郷 由布子 (1993) 「人はどうして『踊りおどり』になるのか—早池峰神楽を題材として」, 民俗芸能研究会/第一民俗芸能学会編 『課題としての民俗芸能研究』, 羊書房

参考文献

- 西城 卓也 (2012)「正統的周辺参加論と認知的徒弟制」, 医学教育, 43 (4), 292- 293
- 齋藤 朱未, 藤崎 浩幸 (2009)「郷土芸能を有する農村集落における集落行事に対する住民意識—青森県平川市平賀地区を対象として—」, 農村計画学会誌, 27, 209- 214
- 佐久間 康富, 山崎 義人 (2018), 『住み継がれる集落をつくる営みのなかの「農村協働力」』, 農村計画学会誌, 36 (4), 500-503
- 佐々木 隆 (2007), 「神楽とともに」, 社団法人岩手県文化財愛護協会
- 笹原 亮二 (2014) 17 民俗芸能と祭祀 – 中在家の花祭の現場を巡って –, 国際常民文化研究叢書7 – アジア祭祀芸能の比較研究 –
- サトウタツヤ, 春日秀朗, 神崎真実(2019)「質的研究法マッピング：特徴をつかみ、活用するために」新曜社
- 佐藤 眞美 (2003)「人が受け継ぐために 岩手県遠野豪大出早池峰神楽」, 農業土木学会誌 71 (3), 255-256
- 澁谷 美紀 (2002)「民俗芸能の変容と地域活性化の影響--岩手県遠野市における伝承活動の事例」, 奈良女子大学社会学論集 (9), 59-73
- 澁谷 美紀 (2006)「民俗芸能の伝承活動と地域生活」, 農山漁村文化協会
- 澁谷 美紀 (2009)「生活文化キャピタルの再構築にみる豊かさの諸相：文化的資源との比較から」, 農林業問題研究, 44 (4), 508-519
- 鈴木 昂太 (2017)『民俗芸能の継承と伝承組織の変容：比婆荒神神楽を支える「名」に注目して』, 総研大文化科学研究 (13), 1-27
- 鈴木 正崇 (2014)「伝承を持続させるものとは何か：比婆荒神神楽の場合」, 国立歴史民俗博物館研究報告 (186), 1-29
- 須藤 武子(1994)「大償神楽の舞の構成」, 山伏神楽研究資料集, 寿田茸以編, 14-22 竹内 一真 (2020)「実践知の生成的な世代間継承を促す教育方法の探求：成人教育におけるナラティブ学習の可能性と限界」, 紀要 = Bulletin, 12, 63-71
- 大正大学地域研究構想(2018), 「地域人」, 大正大学出版会
- 内閣府(2019), 「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン（令和元年改訂版）」
- 仲井 幸二郎 (1981)「民俗芸能辞典」, 東京堂出版
- 中村 茂子 (1989)「伝統芸能の保存組織のあり方の研究—民俗芸能保存会の事例を中心に—」, 芸能の科学 (17), 41-86
- 野口 憲一(2015)『「宗教行事を伴った民俗芸能」の行政支援に際する行政の戦略とその方法--茨城県金砂大田楽を事例に』, 日本民俗学 (244), 37-54
- 橋本 裕之 (1989)「文化としての民俗芸能研究」, 民俗芸能研究 (10), 22-42
- 橋本 裕之 (2015)「震災と芸能 地域再生の原動力」追手門学院大学出版会
- 橋本 裕之 (2016)「無形民俗文化財の社会性：現代日本における民俗芸能の場所」追手門学院大学地域創造学部紀要 (1), 121-131
- 長谷部 正 (2010)「伝統芸能の継承を通してみる農村社会の維持の可能性」, 農業経済研究報告 (41), 69-82

参考文献

- 日比野 愛子, 杉万 俊夫(2011)「祭りを支える人々:博多祇園山笠の事例」, ジャーナル「集団力学」, 28 (0), 42-65
- 俵木 悟 (2009)『民俗芸能の「現在」から何を学ぶか』
- 平口 嘉典, 安江 紘幸, 大室 健治, 稲泉 博己 (2016)「実践コミュニティとしての郷土芸能活動が農村の維持発展に果たす役割:岩手県陸前高田市 O 地区の事例」, 農業経済研究, 87 (4), 424-429
- 福島 明子 (2000)「高千穂神楽伝承者を惹きつける神楽保存会の集团的魅力」, 民俗芸能研究 (30), 16-49
- 福田 裕美 (2004)『文化財政策における民俗芸能の継承にかかわる課題についての研究--「大江の幸若舞」「水海の田楽能舞」「能郷の能・狂言」を事例として』, 文化経済学, 4 (1), 19-30
- 星野 紘 (1999)「民俗芸能復活再生への方策—文化財愛護活動推進方策研究委嘱報告書をもとに」, 芸能の科学 27, 77-94
- 星野 紘 (2009)「村の伝統芸能が危ない」, 岩田書院
- 星野 紘 (2011)「過疎地の伝統芸能の苦闘」, 無形文化遺産研究報告, 5, 29-39 星野 紘 (2011)「日本の神楽衰退と対応策」, 神奈川大学国際常民文化研究機構年報, 2, 249-264
- 星野 紘 (2012)「過疎地の伝統芸能の再生を願って」, 現代民俗芸能論, 国書刊行会
- 本田 安次(1986)「わたしのアルバム 伝統芸能の系譜(付依代考)」, 錦正社
- 松本 雄一 (2013)「実践共同体における学習と熟達化 (特集 人材育成とキャリア開発)」, 日本労働研究雑誌, 55 (10), 15-26
- 見市 建 編, 橋本 裕之, 阿部 未幸 他 (2013)「シンポジウム 東日本大震災と岩手県沿岸の民俗芸能:地域を支えるチカラ」, 総合政策, 15 (1), 91-109
- 三隅 治雄(1985)「民俗芸能の有効な保存伝承方法の確立に関する調査研究 (第一部) —継承者の過去と現在」, 芸能の科学 (15), 1-25
- 三隅 治雄, 大島 暁雄, 吉田 純子 (2004)「日本の民俗芸能調査報告書集成」, 海路書院
- 横井 修一 (2003), 『「機縁法」調査の信頼性について—調査事例による具体的な検証の試み』, 現代行動科学会誌, 19, 1-8
- 吉川 雅也 (2016)「モチベーション理論における主体性概念の探求:組織における主体性獲得のプロセスに着目して」, 産研論集, 43, 115-121
- 和田 崇 (2017) 広島県における神楽の担い手と観光資源化への対応, GEOGRAPHICAL SCIENCES, 72 (2), 43-55
- Halbwachs Maurice, 小関 藤一郎 (1989) ,集合的記憶 /行路社
- Wenger Etienne, McDermott Richard, Snyder William M 他コミュニティ・オブ・プラクティス:ナレッジ社会の新たな知識形態の実践, 翔泳社